

## 第1回 くずし字に触れる—くずし字解読の準備—

巻島 隆

### はじめに

本講座は、伊勢崎市図書館、赤堀歴史民俗資料館の共催による全8回の古文書講座であり、特に近世文書、江戸時代の史料の一端に触れています。講座を修了したからといって古文書が読めるようになるわけではありません。その後の自分自身の取り組み（熱意を伴った）が必要となります。

第1回 くずし字に触れる

第2回 読むための基礎知識

第3回 「和宮下向ニ付、助郷取極」(伊勢崎市図書館蔵)を読む

第4回 今井区有文書(赤堀歴史民俗資料館蔵)を読む

第5回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むI

第6回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むII

第7回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むIII

第8回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むIV

### 1 古文書を取り巻く環境

古文書とは古代～近世の公私文書の総称。

近世文書は村方、町方、商業、宿場、寺社、武家文書（幕府、大名など）などの種類に大別される。

明治時代以降の近現代史料に関しては古文書と特に呼ばないが、これも貴重な歴史資料。日本人の公文書管理の意識の問題。公文書は国・地域の根幹。

①古代・中世文書はほぼ解読され、翻刻（解読し、活字化）されている。

②近世文書は翻刻されていないものが多い。

③近世文書は個人・地域所蔵だと旧家の土蔵（〇〇家文書）、区有文書（村・地区の公民館など）、個人コレクター（〇〇氏収集文書）、公的施設だと文書館・図書館・博物館（〇〇家文書）などに収蔵。

古文書は通常、江戸時代の史料を指すが、受講生のみなさんが目に触れる近世文書は江戸後期のものが多い。その理由は、災害（火災、洪水、地震）と人災（再利用（下張り文書）、火災、故意の焼却）によって失われる。

近年は古書店に売却。古文書は残るが、いいものを抜いて転売するため、史料散逸につながる。古書店の目録や骨董市などで見かける文書群はその一部。

### 2 古文書を読めない理由

理由は何でしょうか。それは寺子屋出身ではないからです。リテラシー（読み書き能力）が異なるのです。日本人は明治から現代に至る過程で徐々に古文

八歳の三月頃から弟子入りをしていました。

稽古場の設備なども、弟弟子の多寡によつてそれぞれ相違もありましたが、稽古場の設置なども、弟弟子の多寡によつてそれぞれ相違もありましたが、大抵どこの稽古場でも、四方は板羽目になつて、縁無しの畳を敷いてありました。正面には教え机を置き、その前に師匠が控えて稽古場を一目に見渡せるようにしてありました。弟子達は天神机(手習机)。江戸時代、手習のとき子供たちが使つた引出し付きの粗末な机を三側さんそくに並べ、年頃の大中小によつて三組に区別くべつされさわっていましたが、師匠一人ではとても大勢の世話を行はくことができないので、その助手として番頭ばんとうというものがありました。番頭は弟子の中から選ばれはれていましたが、これは相當に年も取つて、よくできる者でなければ勤はめませんでした。たゞ世話をするといつても、これが師匠に代わつて代稽古だいさいこもしていました。そして、番頭一人の受持は大抵三、四十人くらいと決まつていました。手習師匠に弟子入りする時期というものは、現今四月一日といふうやうにいきませんと決まつてはいなかつたので、いつから行つてもいいことになつてしまつたが、多くは七年、八八年くらいはありました。

手習師匠にも、武家の師匠と町師匠との一通りありました。武家の師匠は旗本・御家人などのです。文字の上手な者がなっていましたが、文武の師匠には如何なる身分の者があるうちとも、なんらの制限も干涉も受けなかつたのです。幕府ではむしろそれを奨励するという意味で、文武の師匠になつている者は上の覚えも目出度かつたといふのです。

手習師匠と書家とは、全然別種のものであることはいうまでもありません。

別に書家について習わなければなりませんでした。

が使用されていました。従つて楷書といつものほー一種の趣味として普らへらいのもので、公文書、その他の布達なども、必ず草書、即ち御家流が用いられ、出版物には多く行書

していったので、普通一般には使用されなかつたのです。むしろ楷書を実用的の字として認めないくらいであつたのです。現今の人達が隸書を知らぬといつても少しも恥にならないのと同じように、昔の人達は楷書が書けないといて恥にはならなかつたのです。

この時代には、手習師匠のこところで教える文字は、仮名・草書・行書の三種類だけで、決して楷書は教えなかつたのです。その当時は楷書といつものを現今の隸書のよつに見な

上の方では手習<sup>あなまな</sup>を教えるところを寺子屋と唱えていましたが、江戸では寺子屋とは言いません。単に手習師匠<sup>あなまなじき</sup>が横書を教えたかった手習師匠

## 楷書を教えるかべつた手習匠

次は「龍田詣」です。これは省略しますが、近松門左衛門とその兄岡本一抱との合作にというように、字を習わしながら江戸の地名を教えるようできました。

之群集、誠曰々富貴而、万歳春、不可レ有ニ際限一候。恐惶謹言」  
 師・布施弁財天・真間繼橋・弘法寺。関東道・六町一里而、凡三十三里四方之間、六十余州  
 蕊師・両国橋・回向院・駒止石・業平橋・宰府天神・妙儀・梅屋敷・吾妻森・木下川藻  
 川・鐘ヶ淵。寅之方、神田橋・常盤橋・柳原・鳥越・閻魔堂・西福寺・駒形・石原・多田  
 乳山・聖天・吉原・浅茅ヶ原・松崎稻荷・牛島・牛御前・二国稻荷・秋葉・白鬚・隅田  
 林寺・感応寺・東叡山・下谷・広徳寺・幡隨院・清水寺・誓願寺・東門跡・浅草觀音・待  
 台・昌平橋・聖堂・桜馬場・神田明神・湯島天神・麟祥院・妻赤稻荷・不忍池・谷中・瑞  
 赤不動・染井・白山・王子權現・同稻荷・裝束榎・飛鳥山碑銘。丑之方、一橋・駿河  
 丸山・本妙寺・森川宿・根津・三崎・七面・日暮里・道灌山・駒込・吉祥寺・富士・目  
 鬼子母神。北者、竹橋・清水御門・小川町・水道橋・隆慶橋・牛天神・伝通院・小石川・  
 段長屋・牛込・神楽坂・筑土明神・赤木明神・小日向・大塚・巣鴨・護国寺・雜司ヶ谷・  
 長屋・河田窪・原町・早稻田・穴八幡・目白不動・高田馬場。亥之方、田安・飯田町・九  
 西者、麹町天神・四谷・桃園・鮫ヶ橋・権田原・大久保。戌之方、市谷八幡・番町・五段  
 動・池上。申之方、赤坂・氷川明神・粟研坂・青山・千駄ヶ谷・渋谷・金王桜・高井戸。  
 ■六本木・桜田・長坂・一本松・鳴森稻荷・麻布善福寺・笄橋・白銀・瑞聖寺・目黒不  
 太子堂・大仏・一本梗・品川・庚申堂・東海寺。木之方、永田馬場・山王・溜池・日ヶ  
 宿・西久保八幡・金地院・神明・鳥森稻荷・増上寺・三田・春日八幡・魚籃寺・泉岳寺・  
 築地門跡・芝口・金杉・浜御殿・佃島。南者、霞ヶ関・虎御門・江戸見坂・天徳寺・愛  
 川・五百羅漢。辰巳之方、日比谷御門・鍛冶橋・八町堀・木挽町・正一位稻荷・鉄砲洲・  
 渡・靈岸島・新田島・永代八幡・三十三間堂・洲崎弁天・深川靈巖寺・南本所・小名木  
 御城外、東者、和田倉・八代洲河岸・龍口・吳服橋・日本橋・堺町・杉森稻荷・金燈  
 江戸方角は、

假名まりりです。それが終わると、江戸方角といふものを教えました。  
 それは国づくしだすが、国づくしは日本六十余州の国名を集めたもので、これも本字に  
 す。次は国づくしだすが、国づくしは日本六十余州の国名を集めたもので、これも本字に  
 それから手紙の文ですが、これは本字に假名まりりで  
 初めて教えるものは、いろは、次は一二三の数字です。

○文字の流儀はいろいろあります。御家流・大橋流・溝口流・持明院流などが多く  
 なつていてました。これらの模様は「寺子屋」の芝居を観ればすべに判ります。  
 ものは、天神机・硯・草紙十冊がお決まりで、弟子達に分配する煎餅、師匠の方へは束  
 條(じょう)へ入門する時に納める金錢。一朱くらい、奥へ砂糖袋へ一斤(いん)といふのが普通の例に  
 弟子入りの時には必ず女親が連れ行くことになつていましたが、その時に持つて行く

書が読めなくなりました。いくつか波があります。

(1)幕府消滅により**御家流**が書体の主流でなくなり、文字のくずし方が変化。学校では楷書による教育。小説・新聞の言文一致体。

(2)明治33年の仮名の**五十音図の統合**（1音1字、それ以外は**変体仮名**とされ、慣習的に使われる）も大きい。

(3)筆記具の変化。筆からペンへ。さらには書くから入力へ。手紙文化の衰退。

**書札礼**（手紙を書く上での形式的な慣例）の喪失。

(4)特に戦後における**漢学の素養が激減**。漢字の変化（旧字から常用漢字へ）

(5)近年のやさしく表記という風潮。

### 3 古文書の読み手と構成要素

#### (1)読み手

①**歴史研究者**=歴史研究の必要上から古文書学を身に付けた上で、古文書を読み、史実を再構築し、学術論文の中で自説の証拠として用いる。

②**古文書解読者**=楽しみ、知的趣味としての古文書解読。古文書に触れることで、江戸時代の日本の社会・生活・考え方を知り、共感・意外を感じる。昨今の古文書ブームは②に属する。①より②の方が、解読力が優っているケースも。

③**書家**=書道はアート。自己表現手段、また美として古筆を鑑賞（三筆・三蹟など古筆、王羲之など）する。草書、かなの経験者は②となった場合に有利とされるが、それに胡座をかくとなかなか上達しない。

(2)近世文書は「**候文（そうろうぶん）**」と呼ばれる独特の文体で書かれる。

#### ※構成要素

①**漢字**（旧字使用、桜は櫻、発は發、売は賣、触は觸、尽は盡など）

②**変体仮名**

③**漢文的要素**（乍恐、可被下、雖然など返読）

④**記号**（ゑなど）

⑤**踊り字**（くゝゝ々）

⑥**当て字、脱字**が多い。本当の誤字もあるが、近世の人は頓着しない。

⑦年月日は**旧暦**（月の満ち欠けで1カ月、1年354日、大小の月（晦日は29、30日のいずれか。31日はない）、閏月、十干十二支、時刻）。**度量衡**（貫、匁など）

(3)文字の書体は「**御家流（青蓮院流）**」と呼ばれるくずし字。草書（中国で発生）の一種であり、甲骨文字、篆書、隸書、草書、行書、楷書とも異なる字体。古文書は、御家流を「連綿」と呼ばれる連なりで書いたもの。草書は「外国語を学ぶようなもの」（書家）

(4)文章は**常套句**（決まった文字・言い回し）が多いのが特徴。「候」「御」「ニ而」「可被下」「可被成」などの文字、表題の「乍憚以書付奉願上候」、文中の「然者」「扱」「左候得者」、書留文言の「依（仍）而如件」「以上」などの語句。古文書解読は常套句を早く読めるようになると、数カ月の学習期間で半分以上は読めるようになる。早い人なら

1年で丁寧に書かれた公文書を読めるようになる。

#### (5)古文書の性格

①古文書=作成者（差出人）がある意図を以て宛所（宛先）に対して書かれたもの。

江戸時代は身分社会。岡田昭二氏の分類

①上位下達=領主→村・個人へ（掟、触、下知、申渡、先触など）

②下意上申=個人→村→領主（訴願、請書、詫書、届など）

③相互対等=村↔村、個人↔個人（議定、書簡、廻状（人相書き、不斗出の尋ね）など）

②日記・記録=公私備忘録（役用日記、道中日記、触留、風説留、覚など）

③典籍（版本）=和書（往来物、黄表紙、戯作など）、漢籍（四書五経など）

## 4 解読の順序

(1)伊勢崎市図書館の所蔵文書目録で文書番号を申請。県立文書館ホームページの検索を活用。キーワード検索などを使い、目的の文書を探す。群馬県立歴史博物館は障壁が高い。

文書館へ出かける。手を洗う（皮脂が文書を傷める）。申請して原本閲覧。ていねいに扱う。虫食いで開けない場合は無理に開かない。申請してコピーもしくはデジタルカメラで撮影。コピーのない時代の研究者は筆写。これが読む力をつけ、解釈の上で大いに寄与。

(2)児玉幸多校訂『くずし字用例辞典』、『くずし字解読辞典』、電子辞書（広辞苑、歴史辞典など）、『日本史年表』『日本史辞典』など準備。

(3)鉛筆、消しゴム、原稿用紙を用意して解読し、解読字を記す。もしくはパソコンに写真データを呼び、ワードと並列して解読、入力。

(4)不明字は少し考え、わからなければ、あっさり飛ばす。

①仮読み、②再読、③既読字と不明字のチェック。この時点で7～9割方解読。再々読して不明字の検討。不明字の再出箇所で判読できれば、戻って判読が可能となる。

「不明字に当たったら周りを見る」「答えは文書の中にある」。

(5)変体仮名は「覚えるより慣れろ」ぐらいの感覚で。暗記は無理。実戦の中で覚える方がいい。最初は「この字見たことがある」程度でいい。何度も辞書を引く。

(6)漢字は、一字まるごと覚える（しかない）。一文字単体で暗記というより実戦の中で形を覚える方がいい。不明字は偏、冠、によう、垂れ、旁に分解し、見たことがある形を取っ掛かりにし、辞典を駆使して調べる。候補字を挙げ、文脈から推理。不明字は簡単な字であることがほとんど。推理力を高めるには常套句を身に付ける。

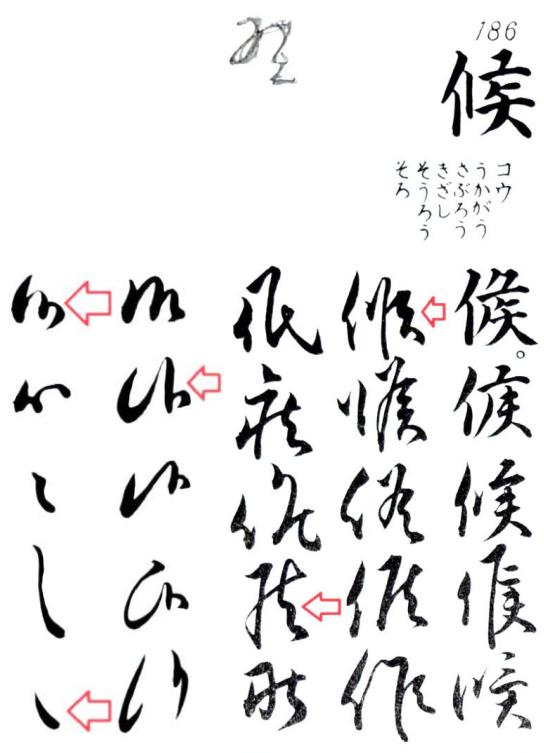
※A Iによる文書解読

①スマートフォンアプリ「miwo（みを）」②凸版印刷A I「ふみのは」（2022年7月運用開始）

①はアプリを立ち上げ、文書の写真を取り、クリックして解読。無料。②は有料。①は版本には通用するが、手書きにはダメ。問題点は解読させた後、誰が正誤を判断するのか。使う人に解読力がないと、機械の誤読を見逃す。

## 5 読めるようになるコツ

(1)毎日読むこと（1週間1回受講しても『絶対』に読めるようにならない）



古文書の構成・名称

(2)予習・復習の繰り返し。『くずし字用例辞典』がキレイは恥と思う感覚。

(3)近世文書の言い回し、常套句を早く覚える

(4)いろいろな種類・書き手の古文書を読む→道場剣法でなく、他流試合を。

(5)読みっぱなしにしない。意味（趣旨）を必ず汲み、批判的に読む

(6)サークルに所属。輪読に参加。独力で読み、読めない箇所を重点的にチェック。

(7)苦手意識を排除する

まず候（そうろう）から覚える。

左は児玉幸多編『くずし字用例辞典』（東京堂出版、一九八一年）の「候」の頁から転載しました。矢印の「候」の形をしっかりと覚えること。最後の「、」は究極のくずしの「ちよぼ候」。

		天			一			表題 端袖
宛	日	<input type="checkbox"/>						
所	付	<input type="checkbox"/>						
（	止	<input type="checkbox"/>						
脇	文	<input type="checkbox"/>						
奥	言	<input type="checkbox"/>						
付		<input type="checkbox"/>						
（		<input type="checkbox"/>						
奥		<input type="checkbox"/>						
（		<input type="checkbox"/>						

地